

# 平成二十八年度 入学試験問題

## 国 語

### 第二回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから七ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

① 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

二〇一三年の四月の一週間、★チエルノブイリに取材に行ってきました。

ぼくはいま、福島第一原発観光地化計画<sup>(1)</sup>という大きなプロジェクトを立ち上げています。そのなかで、原発事故の「先輩」にあたるチエルノブイリの現状を知ろうと思いい、ウクライナを訪れました。実際に原発周辺の見学ツアーに参加し、「観光写真」を撮影し、政府関係者や旅行会社関係者にもインタビューを取ってきました。

取材ではさまざまな驚きや発見がありました。なかでもいちばんの驚きは、チエルノブイリ市がいまも多くの人々の「日常」の場になっているということです。チエルノブイリ市中心部は、じつは原発から一五キロほど離れています。それでも、原発から三〇キロを目安とした地域は、いまでも「ゾーン」と呼ばれる立入禁止区域に設定されており、許可無く立ち入ることはできないし、住むことも許されていません。チエルノブイリ市もいとおうこの「ゾーン」内に含まれています。

しかしだからといってまったくの無人地帯が広がっているのかというと、そんなことはぜんぜんないのですね。チエルノブイリ市には、住民こそいないのだけど、役所があり、研究所があり、食堂もあればバスターミナルもある。車も行き来している。なぜか。考えてみれば当然ですが、事故<sup>(ア)</sup>シヨリにも、除染にも労働者は必要だし、彼らの生活を支えるためのインフラも必要だからです。

そもそもチエルノブイリ原発は、発電はさすがにしているのですが、いまでも送電所としては使われ続けていて、原発内にはおよそ三〇〇〇人の労働者が働いている。A 原発内は労働者がたくさんいるんです。「チエルノブイリ」という記号に踊らされていると、そういう現実が見えなくなります。

短い滞在ではありましたが、ぼくたちはチエルノブイリで、そこでどういふひとが働いているのか、どんな食事を摂っているのか、どんなものを買っているのかを目にすることができました。「チエルノブイリの労働者」と聞くだけだと、防護服で完全防護された人々が悲壮な表情を浮かべて★苦役労働を強いられているすがたが想像されます。これは「フクイチの労働者」でも同じかもしれない。でも実際には違います。チエルノブイリ原発内はかなり明るい雰囲気なのです。的はずれな想像を避けるためには、

<sup>(1)</sup> ジッタイを見るのが一番早い。福島第一原発事故のイメージに踊らされている日本人々は、チエルノブイリに行くべきだと感じました。ちなみに、チエルノブイリの立入禁止区域内の空間放射線量は、東京とたいして変わらないくらいに低いものです。数字の解釈はいろいろだと思いますが、とにかくそれは事実です。

今回の取材で印象的だったのは、放射能や原子力への考えはさまざまであるものの、ウクライナ人たちがひとつ同じ主張をしていたことでした。それは、チエルノブイリ原発事故の記憶は風化しつつあり、風化を食い止めることができるのであれば、きっかけはゲームでも映画でもかまわない、観光客の訪問も賛成だということです。

チエルノブイリ原発事故は世界史に残る事故です。しかしそれでも二五年も経てば風化する。キエフ市内のチエルノブイリ博物館では、メイン★キュレーターのアナ・コロレーヴスカさんがこんな話をしていました。チエルノブイリ博物館は来場者数が落ち込んでいた。B、総合的な災害ミュージアムとして★リニューアルする。コウソウまであった。それが福島<sup>(イ)</sup>の事故が起きたことで、サイヘン計画は立ち消えになったと。

いまの日本では、まだ事故の風化は想像されにくいかもしれませんが。風化の危険を訴えても、みな福島を忘れるはずはないと思っっている。それどころか、まだ傷も<sup>(3)</sup>々々しいのだから、そこにはなるべく触れるなどという論調すらある。C、福島の記憶もいつか風化します。二五年後でも廃炉作業は始まってすらいないかもしれない。それでも記憶だけは風化していく。チエルノブイリはまさにそのような状況になっていました。福島も、いずれ忘却<sup>(ホ)</sup>に対してどう抗うかという問題に直面することになると思っています。

だからこそぼくは観光地化計画を提唱しているわけですが、チエルノブイリの事例はいろいろ参考になりました。D チエルノブイリ博物館では、さまざまな資料や関連情報が、デザインナーの主観のもと、文学的、芸術的に、あたかも★アートワークのように展示されている。日本でよく見られるような、客観的で科学的な資料をできるだけ中立的に展示する手法とはまったく違う。日本人の感覚からすると、歴史博物館というよりも、美術展を見せられているような気持ちになります。

ぼくはメインデザインナーのアナトリー・ハイダマカ氏に、<sup>(4)</sup>この展示方法は適切なのだろうかと尋ねてみました。すると彼は、展示にはむしろ主

観的な感情が入っているべきだと答えるのです。ハイダマカ氏は広島市の平和記念資料館も訪れたらしいのですが、感情抜きで客観的な展示だけでは、出来事の記憶は伝わらないと言います。

ここには重要な示唆が含まれています。むろん、日本とウクライナでは民族性や文化に違いがあるので、単純にチェルノブイリ博物館の方法論を取り入れるわけにはいかないでしょう。けれども、日本で同じような博物館を作ろうとすると、真っ白な壁にグラフや地図やらを並べ、パネルで説明し、あとはコンピュータでも並べて大量のエイゾウデータが閲覧できるようになって……といった光景が思い浮かびます。しかし本当にそれでいいのか。それでお客さんが来るのか。そう考えたとき、チェルノブイリ博物館のような方法があることは頭の片隅に留めて置いていい。

どんなに客観的な情報を並べても、だれも見えてくれないのであれば意味がない。情報の提示だけでなく感情の操作も必要だ、というのが(5)チェルノブイリ博物館の思想なわけです。

(東浩紀『弱いつながり』)

★チェルノブイリ……ウクライナ共和国の都市。一九八六年四月、同地の原子力発電所の事故により、ヨーロッパを中心に広く放射能汚染をもたらした。

★除染……放射能物質による汚染を取り除くこと。

★インフラ……道路など、生活の土台として整備される施設。

★防護服……放射能物質から身を守るための衣服。

★苦役労働……苦しい肉体労働。

★キュレーター……博物館資料の収集、研究や展示企画の担当者。学芸員。

★リニューアル……新しくすること。改装。

★抗う……抵抗する。

★アートワーク……美術・工芸での製作物。

問一 — (1)「福島第一原発観光地化計画」とありますが、「観光地化」のねらいはどのようなことですか。本文全体をふまえて、解答らんに二行以内で説明しなさい。

問二 — (2)「『チェルノブイリ』という記号に踊らされると、そういう現実が見えなくなります。」とありますが、「記号に踊らされている」人たちは、チェルノブイリがどういう場所だと想像してしまうのですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問三 (3) に入れるのにふさわしい言葉をア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仰 イ 棘 ウ 生 エ 初

問四 — (4)「この展示方法」とありますが、どのような方法ですか。解答らんに合うように、本文中の言葉を用いて五十五字以内で書きなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

《(五十五字以内) 方法。》

問五 — (5)「チェルノブイリ博物館の思想」とありますが、これとは対照的に、日本の博物館はどのような思想をもっていますか。解答らんに合うように、本文中から二十五字以内の箇所を抜き出しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

《博物館は、(二十五字以内) べきだ、という思想。》

問六 A D に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア けれども イ そのため ウ たとえば エ つまり

問七 — (ア) (オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

## 問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア チェルノブイリ市は放射線量が高い「ゾーン」に指定されており、立ち入り取材を許されなかった筆者は、やむなくキエフ市でインタビューを行なった。

イ 取材先のウクライナ人は、放射能や原子力に対してはそれぞれ異なる考えをもっていたが、観光客の訪問を歓迎する<sup>かんげい</sup>という点では同一見解を示した。

ウ 日本でもすでに福島第一原発事故の記憶は風化しかかっている<sup>かたむ</sup>ので、今こそ福島の人々の実際の声に耳を傾け、博物館を増やしていくべきである。

エ 日本とウクライナでは文化や民族性が違うので、チェルノブイリ博物館で筆者が新たに知った展示方法は、日本の博物館の集客力向上には役立たない。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

主人公の灯子は塾で授業を受けているところです。

「石油は、ブランクトンなど大昔の生き物からできたものです」

うなずきながら、あたしは石油のこと、石油から作られる灯油のことをぼんやりと考えはじめた。

寒いときはエアコンではなく、ファンヒーターでもなく、ガラスの★  
\* ぼやがついた石油ストーブにあたたまるのがいいな。

火がついたばかりの匂いもいいし、女王様のティアラみたいに燃える火はともきれいだもの。

窓から見える空には雨雲が広がっていく。

(1) あたしの空想も広がっていく。

そうなんだ、生き物は石炭になったり石油になったりするんだ。

おばちゃんの家はマグノリアの木は石炭になり、猫のムンクは石油になる。

遠くでかみなりの音がかすかにきこえた。

そしてあたしは……あたしも虹色にかがやく石油になる。

石油は透明な灯油になり、どこかの家に運ばれる。どこかの家であたしはブルーとオレンジの輪っかになって A 燃える。するとだれかがあ

たしの前で手をかざす。そして紅茶をのんだり、おしゃべりしたり、ほかほかとあたたまっては幸せな気分になるんだ。

あたしはいつか石油になりたい。そうすれば、あたしがいたことにも意味ができるもの。

遠くの空で稲妻が光っていた。

塾の帰り、 B と小雨が降りはじめた。あたしたちはかばんを頭の上にかざしてバス停まで走っていった。

塾からは市内をまわる循環バスで帰る。家までは歩ける距離なのだけれど、帰りだけはみんなと同じバスを使っていた。あたしのほかに五人の女子が同じバスにのる。あたしがおりののは家に近い六丁目のバス停ではなく、ひとつ先、きいちゃんと千夏の家に近い六丁目のバス停だ。六丁目のバス停前には大型スーパリーがあつて、そこであたしたちは雑誌を立ち読み

25

20

15

10

5

したり、ジュースをのんだりする。

凧さんだけがひとつ手前、五丁目のバス停でひとりでおられる。

雨が降りはじめたバスの中は混雑していた。

大きくバスがゆれると、千夏が凧さんのほうへだれかを押す。押された人は足をふんばる……拒食症★  
★ 拒食症(こしょくしょう)のこと。凧さん自身もそのゲームに参加しておもしろがっているようだ。やせていることを自分のウリにするのもひとつの手。ときにはそれでわらいもとれる。それくらいはいくらマイペー

スな子でも学習する。

凧さんが細い腕をのぼすと、みんながバリアをつくる。タッチされてもまただれかにタッチしてまわせばセーフ、拒食症の伝染はまぬがれる。

稲妻が窓ガラスの中をキリキリと走った。

あたしは外をながめた。暗くなったガラスに凧さんのすがたがぼやけてうつつっていた。窓の中で彼女はまっすぐに立っている。倒れないよう両足を広げて。

凧さんならぎりぎりまで倒れないだろうな。それでももちこたえられないときは、立った姿勢のまま倒れちゃうんだ。きつと、前に向かつて。

水滴が、ちいさいへびみたいにガラスの上をジグザグにすべっていく。

こちらを見ていた凧さんと窓の中で視線が合った。

ほんとうはあたしではなく、ガラスの向こうの何かを見ていただけなのかもしれない。でも、凧さんの目は静かにあたしを透かしていた。するとあたしの心がちぎんでいく。ソーダ水みたいに C とかすかな音をた

てて。

かみなりの音がきこえる。

もうすぐ家の近く、凧さんがおられる五丁目のバス停。そのつぎがみんながおられる六丁目のバス停。

凧さんは強いから平気でいられる。どうせ子どもっぽいばかりかゲームだとわりきっているんだ。そう考えていたときはしゃいだ声がきこえ、千夏の手が腕にふれた。タッチがあたしにきたのだ。

ゲームを続けなきゃ。すぐにだれかにまわさなきゃ。まよっていると車内が一瞬、かみなりの閃光に つつまれた。

つづいてドーンと音がした。

青白い光にさらされた光景はストロボライトをあびたみたいにかびあがり、一瞬、時がとまったように見えた。あわてて外に目をやった。しか

60

55

50

45

40

35

30

しガラス窓は外の景色ではなく、鏡のようにはつきりと車内をうつしだしていた。あたしは目を見ひらいた。

千夏もきいちゃんもほかの人もバスの窓にはうつっていない。凧さんとあたしだけが、ガラスの中の世界にいた。

ふたりだけのバスは寒々としていた。エンジンの音も車内のさわがしさも耳から遠ざかった。音のない世界の中で、窓にうつった凧さんは平気な顔などしていなかった。

凧さんは泣いていた。

細い手であたしにすがりつき、しきりに何かを言いながら凧さんは泣きじゃくっていた。涙がめがねの下からほおをつたって落ち、きゃしゃなあごの先に **D** としずくとなつて光っている。しゃくりあげるたびに薄い肩が大きく動く。

そして、あたしはそんな凧さんの腕をふりはらつて目をつりあげ、口をきつくむすんで、すがりつく凧さんをつきはなしているのだ。

あたしにもほんとうはわかつていた。人間は石油になつてなれない。たとえ、なれたとしたつてだめなんだ。死んだあとにだれかをあたためたからつて、今していることがチャラになつてならない。生まれてきた意味なんて、自分で見つけなきゃするいんだ。

バスのエンジン音もどつた。車内のさわがしさがいつぱんに耳に押し寄せてくる。

窓の中にはそのままの車内がもどつていた。泣いた凧さんも、いじわるなあたしも、ガラス窓の中から消えていた。鏡に思えた窓は、ただのくもつたガラスでしかなかった。

「かみなり、ちょう近くなかつた?」「まじ、びびつたよねえー」みんなはひとしきりさわいだあとに、またもとのゲームにもどつた。「灯子の番だよ」千夏がそう言つてあたしを見た。あたしがだれかにタッチするのをまっつている。

バスの中は息ぐるしかった。もうおりたいと思つた。みんながおりのバス停でなく、あたしのほんとうのバス停で。

そうしないともう二度とおりられないような気がした。 **(3)** 大人になつても、十二歳のあたしはこの循環バスに残り、夕闇の町の中を永遠にぐるぐるまわり続けるんじゃないかつて気がした。

あたしはタッチされた手をバスの停車ボタンにのばした。

みんなが顔を見合わせる。ボタンは遠くにあつた。手が届かない、まつ暗な宇宙のはてにあるくらい遠くに思えた。

バスはカーブにさしかかり、そこから先の道はふた手に分かれている。ボタンに指がふれた。

思いきつてぐつと押した。赤い星のように停車ランプはかがやいた。——つぎ、とまります。

無機質な声が車内にひびく。カーブのゆれで、つり革につかまっていたみんなが安っぽいあやつり人形のようにそろつてグラリとよるめいた。

あたしは足をふんばつた。前の道をぐつとにらみ、倒れないよう必死で足をふんばつた。

凧さんはまっすぐに立っている。そのうしろ、五丁目のバス停のあかりが薄闇の中にかんで見えた。

「**(4)** あたし、今日はここでおりるから」

それから凧さんに顔を向けた。

「凧さん、あの、とちゅうまでいっしょに帰らないかな」  
みんなはポカンと口をあけ、凧さんはびくりしたようにこつちを見つめている。

バスはとまつた。

あたしはゆつくりとステップをおり、凧さんがあとに続いた。ほかの乗客もそのあとにおりてくる。おりた順のまま、凧さんはあたしのあとを歩く。でも、傘は重いのかどんどん角度を下げていき、あたしの頭にかぶさり、とうとう顔のまん前をかんぜんにふさいでしまった。

あたしはふりかえつて言つた。

「傘、ありがと。でも、前がぜんぜん見えないんですけど」

「うん、わざと」めがねの奥の目がじつと見つめた。「さっきの仕返し」

「え、さっきつて」思わずきき返した。「仕返しつて?」

凧さんははつとしたような顔をした。それからゆつくりと首をかたむけた。

「なんだろ。なんだか、一瞬そんな気がしたんだけど……わかんない。ごめん」

ガラス窓の中に凧さんもあたしと同じものを見たのだろうか。

「ほんと、どうしちゃったんだろう」と言いながら、凧さんは髪をぼりぼり



## 問六

情景描写が巧みに用いられている本文において、天候に関する描写はどのような効果をもっていますか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 遠くの空で光る稲妻はこれから雨が降りだし、天候が悪化していくことを予期させるものであるが、この場面では、もう自分のすぐそばまで危険が近づいており、早く逃げないと巻き込まれるという危険信号として機能している。

イ 稲妻が窓ガラスの中をキリキリと走ったという表現では灯子が凜さんの心の痛みをはっきりと理解したことが表現されているが、実際に著者がキリキリという言葉で表現したかったのは拒食症ここに對する灯子の心の痛みである。

ウ ちいさいへびみたいにガラスの上をジグザグにすべっていく水滴は、本当はよくないと知りつつ嫌がらせに加わっている自分自身の後ろめたさと重ねて理解することができ、凜さんという獲物を狙って近づく加害者の視点を伺うことができる。

エ 雨がやんでいるという描写は灯子と凜さんの間にあったぎくしゃくした関係が一掃され、また新たな心持ちで二人別々の道に踏み出すことができるという希望を読者に伝えつつも、またいつ雨がふるかわからないという暗示になっている。

## 問七

A 〽 D に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ちらちら                      イ ぼたぼた  
ウ シヤワシヤワ                  エ ぼつぼつ

## 問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 凜さんは普段はそう見えなくても実は自らがいじめられていることを気に病んでおり、ついにみんなの前で自分の気持ちを爆発させるに至った。

イ 灯子は凜さんの強さを内心ねたましく思っていたため、守ってあげるふりをして傷つけるつもりが、結果的に両者を深く結びつけることになった。

ウ 強く決意して自分のほんとうのバス停でおりた灯子は、言葉に出さないが凜さんと今まで以上に親密な関係を築くことができたと感じた。

エ 灯子以外の塾の友人は凜さんのことを取り合うような関係であり、自分たちよりも灯子を選んだ凜さんは裏切り者と思われるってしまった。